

## 第19回夏期福音特別集会 第2回聖書講筵

## 唯一つのみ

――ルカ伝第10章38～42節――

1972年8月26日

小池辰雄

マルタとマリヤ 天賦天職 瞑想と活動 静動一如 マルタ・マリヤ一如の姿 万法帰一 無  
者 東洋と西洋 『荒野に水は湧く』

## 【ルカ10・38～42】

38 かくて彼ら進みゆく間に、イエス或村に入り給えば、マルタと名づくる女おのが家に迎え入る。39 その姉妹にマリヤという者ありて、イエスの足下に坐し、御言を聴きおろしが、40 マルタ饗応のこと多くして心いりみだれ、御許に進みよりて言う『主よ、わが姉妹われを一人のこして働かするを、何とも思ひ給わぬか、彼に命じて我を助けしめ給え』41 主、答えて言い給う『マルタよ、マルタよ、汝さまざまの事により、思い煩いて心勞す。42 されど無くてならぬものは多からず、唯一つのみ、マリヤは善きかたを選びたり。此は彼より奪うべからざるものなり』

## ●マルタとマリヤ

○先生の感話を承りまして、これほどに、私にしめされたところを、また私の気持をピタリと受けとつていらつしやることに、私は実に驚くのです。世の中には友情というものがありませんが、こういう類の友情というものは地上における宝だと私は感じました。それは私の悲願というものを本当に共感して受けとつていらつしやる。現実の私なんかは問題じゃない。悲願を共にする、そういう人がいつまでも一緒に行けると思っているわけです。その悲願においてお互いに信じていくということです。

今日は、マルタとマリヤ、もうご承知のところですが。もちろん、私も前にお話をしたところでもありますが。ルカ伝10章38節から42節です。

38 かくて彼ら進みゆく間に、イエス或村に入り給えば、

この「ある村」というのは、学問上は結論がでにくい。「マルタとマリヤ」というのを見ていると、これはどうも

「ベタニヤのマルタとマリヤ」

としか思われないので、なぜ、ルカが「ある村」なんていうようなことを言っているのか。



しかも、このルカの旅行記の中で見ていると、まだエリコにも着いてないような時ですから、どうも、「ある村」は、そういつたことからいうと、ベタニヤでないように思われるのだが、内容を見ると、どうもベタニヤだと思われる。まあ、どこでもいいですが、一応、ベタニヤのマルタとマリヤということにしておきましょう。もちろん、女の方の名前には、マルタとかマリヤなんていうのは非常にありふれたような名前ですから、同じのがなかったともいえないわけです。「マリヤ」という言い方はギリシヤ的な言い方で、ヘブライ的な言い方は「マリヤム」あるいは「ミリヤム」という。「マルタ」は「マルタ」でいいけれども。

イエス或村に入り給えば、マルタと名づくる女おのが家に迎え入る。

というので、どうもこれは女主人であるらしいので、マリヤの方が妹である。ベタニヤのマルタとマリヤの所には、イエスはエルサレムに入られたときからちよいちよい訪ねられたわけです。あのラザロの甦りのことも、あれもマルタとマリヤの兄弟です。あのラザロの復活のところを見ても、マルタとマリヤの在り方がことよく似ている。やはり、マルタの方が行動的で、マリヤの方が受動的で、動的に対して静的である。

39 その姉妹にマリヤという者ありて、イエスの足下に坐し、御言を聴きお

しが、

もちろん、キリストは家の中に来られて話される時には、坐って話していたらしいですが、マリヤはそのイエスの身近にはべつて一生懸命で聞いている。マルタの方は、

40 マルタ饗応のこと多くして心いりみだれ、

「ディアコニッセ」という、非常に奉仕する女の人たちがドイツあたりにありますね。あの「奉仕」という字がこの

「饗応」<sup>もてなし</sup>「ディアコニア」

という字です。キリスト教会で「奉仕」というようなことを言うのは、みんなここから来ている。マルタ的な面です。このディアコニアのことに心を用いて、

「心いりみだれ」

というのは非常に気を配って気ぜわしいようなことです。

御許に進みよりて言う『主よ、わが姉妹われを一人のこして働かするを、何

とも思い給わぬか、彼に命じて我を助けしめ給え』

マルタは忙しいので、マリヤに直接に

「あなたは助けなさいよ」

と言わないで、聞いているマリヤのことをキリストの方に、

「何とも思わないんですか、何とか仰ってください」

と、多少、不平でもないでしょうけれども、要求がましいようなことを言ったわけでは

41 主、答えて言い給う『マルタよ、マルタよ、汝さまさまの事により、思い

煩いて心勞す。42 されど無くてならぬものは多からず、



この「多からず」という訳しかたよりも、「少なし」と原語の通りに訳した方がいくらい  
です。

唯一つのみ、マリヤは善きかたを選びたり。

「かた」というのは、お皿でいうと、一皿、分け前、パートです。善き分け前を選んだと。

此は彼より奪うべからざるものなり』

と。まあ、読んで字のごとしで、非常にやさしいわけです。

この話は、もちろん、マルタが心乱れないで、ひたすらマリヤは聞いているが自分はひ  
とつ大いに奉仕しようと言って、一心に奉仕していれば、それはマルタの本当のマル  
タらしい姿だったんだろうけれども、マルタがこういつたことをキリストに言ったことが、  
彼女のひとつのまじりかたで、また働きの本当にひたむきでなかったということは、ど  
うしても言わざるをえない。けれども、キリストはそのことを別に責めない。

「マルタよ、マルタよ。お前はよくやってくれているが、しかし、大事なものは一つ  
のことだ」

と。マルタにしたって、一生懸命でやるのが一つのことなら、それも大事なことも知  
れない。この場合の大事なことは、キリストに聞き入ること。もうイエスは地上にはいな  
くなる。イエスから聞くことはもうそうたびたびない。非常にまた、他の人から聞けない  
ことなので、それをしつかり聞いているということは大事なわけです。イエスがマルタに  
言われたこの言葉は、世の末までも、キリストに聞くとということはどういうことかとい  
うこと、その態度をこのマルタの一声に対して、はからずもキリストは発せられたわけ  
です。

### ●天賦天職

私は教育の面でも、学校の校長みたいなことをやってみても、担任の先生方に、

「一体、その生徒の一番の中心の特色は何であるか。天から賜っているところの天  
賦が何であるか。どうぞ、それをよく見てもらいたい」

と言って。天賦、天性、天資、それが天職に通ずる。  
大体、日本は大学生が多すぎる。こんな大学生の多い国は頭でつかちでひっくり返って  
しまう。もつと身体と手足のしつかりしたものにならなくては。日本人の構造が本当にバ  
ランスのとれた構造にならないで、手足が細くて頭ばかり大きくて――その頭も空っぽ  
な頭でね――そんなのは全くおかしいものだ。このままにしていくと、日本はどういうこ  
とになるかと正直思う。本当にそうです。

「教育ママ」

なんてのはとんでもない話です。これまた、政治も悪ければ、社会の通念も悪ければ、結  
局煮つめてみると、教育者の責任です。小学校から大学にいたるまで教育者の責任です。



私も責任者の一人で申し訳ないわけです。

特に私の学校の生徒は男子ばかりですから、男は一生をかけて、ある一つの仕事をしようになっている。それが何であるかの見当付けはまだ中学校、高等学校ではちょっと無理でしょうけれども。しかし、生涯をかけて自分は一体何を本当にすべきか。その「すべき」はいろんな情勢から判断するのではない。自分の内を見る。自分の内を見て、そして自分に一番備わったもの、これならばという、これが好きだという――大体、好きということに、天賦のところが好きこのみの自分に対する判断があるわけです。実は、人間は好きなことしかできないんだ――その好きなことに没頭しなくてはいかん。

ここにはお菓子屋さんがいらつしやるが、これは本当に結構なことだと思う。お菓子を作るのが本当に好きなんだ。それに打ち込んで、世界一のお菓子を作ればいい。そのうちに集会に持ってきてきていただきたい(笑)。そうすると、非常に集会にまた力が出てくる。頭の大学生が多くて、妙な質問ばかりされたらどうにもならん。

「私はもう大学生はやめようかな。本当は大工になりたい」

という人は大工になれば、これはキリストの直弟子になる。とにかく、

「その生徒の特性をつかえまして、それに力をつけてやる。それに関連する科目では絶対に優をとるぞと、それだけの意気込みをその生徒に与えるようにしてくれ。

そしたら、もしそれが国語が好きをやつたら国語の力をつけてやる。数学が

嫌いだったら数学は零点でもいいよ」

と。まあ、そんなことは校長として言えませんがね(笑)。そういう気合なんです。平均点が何点とらなければ、また、平均レベルに間に合わないような点数の科目がいくつあれば落とすの、何のかんのと、七面倒臭い内規みたいなものがある。そういうのは教頭さんがやってくれるけれども、私はそういうのはひとつもおもしろくない。しかし、根本方針ははつきり与えているわけです。

好きな科目に打ち込んでいくと、学校が楽しくなる。そうすると、他の科目にも及んでいく。その科目を中心にして段々、関係の近いものからその他の科目に対する興味がわいてきて、段々有機体的にその人は動きだすんだ。その中心が段々動きだす。嵐みたいだ。渦を巻きながら前進していく。ところが、数学の嫌いな者に先生も一生懸命で補講してみても、その数学の嫌いな生徒がやってみても、くたびれてしまって嫌気がさしてしまう。先生ももうたまらない。どっちもくたびれてしまって、何も得ない。そして、大事な、自分の好きな科目はちつとも進んでいかない。そんな馬鹿げた話はないですよ。

大体、この学校制度というものは困ったものだ。私のところは私立だから、かなりそういう気持をうちだすことができるが、公立なんていうものは規格版ですから、公立の校長さんはこぼしているよ。妙な組合があるし。いつかも、校長会議に行ったら、

「私たちはまるでロボットみたいなので、私立の校長さんはうらやましい」



なんて言うから、

「はやく、やめなさいよ」

と言ったら、

「やめたらあと、採ってくださいるか」

なんて言うから、ちよつとそう簡単にはいかないけれども（笑）。全く非常に日本という国は不合理と無駄が多い。本当の意味における合理性と弾力性を持たなければダメなんです。

そういう天賦、天性、天資というようなものを自覚して打ち込んでいけば、楽しくなる。始めは努力精進は必要です。それは辛いことだつてあるさ。患難を通らないかなる偉大なものもない。患難を通つて楽しくなる。患難のうちに楽しさが必ず伴う。何でも喜びや楽しさが随伴してこないものは本当ではない。楽しさを求めるのではなくて、楽しさは随伴してくる。求めるのは享楽主義だ。自然に楽しさが随伴してくるのが本当の世界です。

一つのことを中心に展開していく。私は、これはやはり教育の秘訣だと思う。今度、何だい？大学の入学試験を画一的にやろうなんて、また馬鹿げたことをやろうとしている。あの審議会というのは、どうしてああいう馬鹿なことを考えるか。それぞれの特色がある。京都大学なら京都大学で、東京大学は東京大学で、それぞれ特色をもつてやったらいいですよ。何も画一的にすることはない。

画一主義、類型主義はダメです。個の善さというものを本当に認識し、個におけるある一つの絶対的なところをみて、それが大きな調和にいかなければいかん。そういう、もろもろの差別を――差別というのは、何も差別をするという差別ではない――違いのあるところのものが初めて有機体となる。

これはパウロさんがコリント前書12章、ローマ書7章か6章かでちゃんと書いているんだ、人間の身体みたいものだ。全身が目だったらどうするか。手も足もいろいろなくてはならん。人体というのはそういった有機体的構造で、社会もやはりそういった生命的有機体的人格的構造です。そういう分かりきったことがどうして分からないか。

### ●瞑想と活動

やはり、この福音を、聖書を本当につかめば、そこから出てくる。聖書だけはそつちのけにしてやっているんだからね、文学の世界でも、哲学の世界でも。やはり、何といつても、偉大な仏典とこの聖書、これは世界の精神の一番土台をなしているところの推進力なんです。

マルタとマリヤも、これは西洋と東洋の代表みたいなひとつの型です。マルタというのは、もし描けば、三角形（△）です。マリヤは円（○）。

西洋の形は、

「テーゼ・アンチテーゼ・ジンテーゼ」「正・反・合」



の構造でもって思索しまた行動していく。思索また行動の形です。

東洋の方は、瞑想・直観して悟入していく形です。だから、仏教はやはりこつち(○)の方です。キリスト教は実は両方もってはいなくてはいかん。いかなる三角も、どのようなびつな三角でもみんな円の中に入ってしまう。だから、真理の最高の表現は円です。

日本人は太陽をじつと見て、あるいは満月を見て、瞑想すれば素晴らしいことなんだけれども。どうして、真理がこぼれているのに、それを見ないかと思うね、僕は。太陽(日の丸)というのは世界の最高の国旗ですよ。それを近頃は国旗をないがしろにしています。国旗を掲げると何か妙な国粹かと思っている。そうじゃないよ。まあ、何というケチくさい根性かと思う。

「ノン ムルタ、セツド ムルトウム」

という言葉がある。英語でいうと

「ノット メニイ、バット マッチ」

です。いろいろなことを雑多にするのではなくして、一つのことを深くやる。

「量ではなくて質である」

ということです。

「間口ではなくて奥行き」

という。何と言つてもいい。間口の広いのではなくて、奥行きの深いやつ。これが「ムルトウム」(質)です。そういった、ある一つのことを、中心を深くやっていく。それを深くしていくと、今度はもの凄い幅が出てくる。いわゆる雑多はダメなんだ。

偉大な人を見てごらん。たとえばゲーテでもベートーヴェンでもレンブラントでも、もの凄く打ち込む。そして、そこからグーッともの凄くまた多様性が出てくる。大事なことはこの打ち込みなんです。打ち込みをしないで、まあ、教会でもそうだよな、あつちこつち聞いて、どれがいいだろうかと比較研究している。そうでなくて、一つのところを「これが」と思ったら、そこに打ち込んでこなければダメです。何でもそうです。

分裂しているのが一番いかん、あつちもこつちもなんて。「ツバイフェルン」「疑い」というドイツ語があるが、「二つに分かれる」ということで、疑いが生ずる。それがもつと悪くなる、「フェアツバイフェルン」といって、「絶望」してしまう。

大雑把にいうと、片一方は静的であり、片一方は動的である。しかしながら、マルタはその動的において分裂していましたから、これがいけない。動は動で徹すればいいんです、動に。ところが、マリヤの方は静かに聞き入っていた。

「マルタがあんなにやっているから、私もちよつと途中で聞くのをやめて、手伝おうか」

なんて思わない。マリヤはここで本当に一つだった。この場合、キリストが特にマリヤのことを言われたのは、マルタの姿が分裂していることと、それから、



「今、私のことを聞くことが絶対に大事なことだ。仕えてくれることはありがたいけれども、それはどうでもいい。今、私が一番欲していることは、ご馳走を用意してもらおうことではなくて、断食でもいいから聞いてもらいたいんだ」

と。本当はこの集会もあまりご馳走がありすぎるね。断食集会というのをこの次はよろうかな、もつぱら聞くのを。そういう集会もたまにはやらなくてはいいかん。一日二食とか、お昼は抜きとかね。今度はそうすればよかつたな、なかなか晩にご馳走が出るから。

中世のカトリックの世界ではグレゴリウスという偉い法王がいましたが、その人の言葉に、

「ビア・アクティバー」(活動的な道)

「ビア・コンテムプラティバー」(瞑想の道)

という言葉がある。「ビア」というのは「道」で、「ビア・アクティバー」は「活動的な道」で、「ビア・コンテムプラティバー」は「瞑想の道」です。瞑想の道と活動の道がありまして、カトリックではこの瞑想の方を上におくんです。

ダンテの『神曲』の天国篇では瞑想の聖徒たちが上にいる。瞑想というのは祈りの世界で深く神の世界に入っていく。これが即ち

「瞑想」「コンテムプレーション」

で、それから、「活動」は奉仕の方です。瞑想の方を上位においてあるわけです。もし、他の言葉でいうと、マリヤは信仰の世界、マルタは行為の世界。信と行です。

### ● 静動一如

あの「マリヤ観音」というのはおもしろいね。隠れキリシタンのマリヤ観音です。あれはキリストの母マリヤだな、このマリヤではない。観音かんのんというのは音を観る。キリストの音を観ている。ただ聞いているのではない。音を観るといふのは素晴らしい言い方ですね。さすがに仏教は素晴らしい。音を聞くのは聞音ぶんおんだね。もし、マルタの方が本当にマルタらしきならば、それは聞きてこれを行うといふ聞行ぶんぎょうとでも言うかな——そんな言葉はないよ——けれども、そのようなことになる。マルタは聞行の方である。マリヤは観音の方です。マリヤは音を観ている。キリストの音を観ている。

私の語っている言葉の意味を、「どうだこうだ」と頭で聞いている人はダメですよ、その響き受けとってないと。即ち、音を観るのは、その響きを身体で受けとってないと、音を観るといふ世界にはならない。そういうことで、マリヤは正に観音だ。あのマリヤ観音とは違うよ。キリストを正に観音している。まあ、そういった区別が一応考えられるわけです。

さつきダンテのことを言いましたが、ダンテを導いた「ベアトリーチェ」はマリヤ型です。煉獄篇に出てくるところの「マチルダ」という女性があるが、これは一生懸命で花を摘んできれいにしようと思っていた。これはマルタ型になる。あそこもダンテはそのつもりで



書いたのではないかと思う。

それでは、イエスという方はどういう方かというのと、彼は正に神の観音者であつた。神の音を観ていた。キリストは父なる神の声を聞き、神の声を観ていた。即ち、イエスは父なる神の観音者であつたわけです。キリストはひたすら父に聴いていた。

「**汝の御意を成させたまえ**」

と言うときには、御意が分からなければならぬ。御意を聴き識るわけです。そして、

「**自分をどうぞお使いください**」

と言つて提身しているわけだ。もちろん、傍観しているのではない。提身して、どうぞお使いくださいと。キリストは神さまの声をひたすら聴いていた。ひたすら聴いて、それを身に受けとる。神の声が、御言が彼の中に入ってくると、これが動きだす。これが体現の世界に入ってくる。

だから、キリストにおいてはマリヤとマルタが一如になっている。もちろん、マリヤが先です。真のマリヤとなれば、自在にマルタとなる。マリヤとマルタは実は分けてはいない。真のマリヤは同時に自在に時あつてかマルタとして動く。その時に、

「どうか、あのみマリヤに私を助けさせて」

なんて言わないで、黙々として背負っている。集会を背負って動いているような在り方になる。そうすると、他の人も自然に動きだす。自分の行動が人を動かせるような動かし方。自分の言葉が人を本当に、魂をゆり動かすような言葉。そういうのが本当のマリヤ・マルタ一貫の世界です。静動一如です。静中の動、動中の静という境地がそこにくる。これが本当は我々東洋人の――西洋人には分析的な頭だからなかなかそれが来ないんだよね――静動一如の生き方です。

### ●マルタ・マリヤ一如の姿

たとえば、イエス・キリストが、

「**律法は何か**」

と問われたら、

「**心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、精神を尽くして、汝の神を愛すべし。汝の隣人を愛すべし。これ一つなり**」

と言われたでしょ。縦の関係と横の関係は一つだよ。しかし、縦を先に仰つた。神さまとの生命の、愛の――これは正に生命懸けの愛だね、生命を懸けての愛だ。神への生命を懸けている愛、また神からの生命を懸けての愛――この愛の貫きがあるところには横に向かつて動いていく。人を愛さざるを得ない。

「愛すべしというが、どういうようして愛するんですか」

なんて、何を言うか。これは愛さざるを得ないんです。そんな内容を分析することはない。



愛するとは人を助け上げること、救い上げること、担い上げることです。だから、

「これは一つなり」

とキリストが言われたでしょ。これは、

「マリヤとマルタは一つなり」

と同じことなんです。けれども、マリヤの線は先に立たなければダメだよ。モーセの十誡もそうです。神との関係が先に立っている。それから人倫の関係です。

この縦の線がないのが今の民主主義です。ダメだよ、そんな民主主義は。

「民主主義、民主主義」

と言って、まるで偶像にしてしまって、日本人はへんてこな民主主義に囚われてしまった。どうにもならん。大体、もう秩序がなくなってきた。先生が生徒に丁寧な言葉を使っているのは、何だと言うんだ、僕は。また、生徒が先生に同僚みたいな言葉を使っている。

「私はそういう言葉には答えないんだ」

とはつきり言ったですよ、大学紛争で吊るし上げをくったときに。生意気なことを言いやがったから、黙っていた。

大体、日本人には本当にいいすじがあつたんです。それはやはり孔子さんの教えの中にあつた。けれども、ただ孔子・孟子だけではどうにもならなくなりました。そこにいろんな偽善的な要素や封建的な要素も加わってしまった。けれども、私は今、『論語』や『孟子』や『大学』『中庸』なんてものをかじってみると、やはり昔の一流のああいう人物は素晴らしいですよ。読んでごらん下さい。

聖書の光で読んでごらん。楽しくてしょうがないから。もつと古典を読まなくてはいいんですよ。今どうですか、マンガばかり読んでるね、大学生まで。週間雑誌とマンガばかりで、日本はもう精神的に本当に滅びていく。内村先生が生きていたら、何と云うかね。

本当に皆さんは毅然<sup>きぜん</sup>としていなくてはいかん。御霊、御言の権威を、この聖霊をいただいたからどの人も本当の権威を持つ。これはぶつつぶれている人が持っている権威だよ。

「キリストを信ずると、一体、自主性はどうなるのか」

なんて、青年はすぐ「自主性」なんていうことを問題にする。

「我々の意志の自由はどうしてくれますか」

なんて、そんなことを言っているうちはしょうがないよな。道徳の世界、文化の世界では、エラスムスの「自由論」はそれ自身、真理性をもっています。けれども、もうひとつ次元の高い世界になると、マルチン・ルターの言った「奴隷意志論」の方が真理なんです。ルターが「奴隷意志論」を書いて、エラスムスと戦ったのは正にその角度です。

マリヤ線をしつかり立てて、そしてマルタのように――動いていても内側は静かな世界を持っている。静かであるが内側に燃えるがごとき動性を持っている――そういう自由な



在り方が本当のその人の姿です。これは本当にマルタ・マリヤ一如の姿です。たとえば、皆さんがいろんなことをやっているでしょ。働いている。しかし、働いている中に、何か落ち着きがある。あくせくしない。それはマリヤの線が入っているから。マリヤであるが、しかし、ただボヤッと眠ったような顔して聞いているのではない。いつでも、

「ちよつとあそび」

と言え、パッと跳んでいくようなことができる動性を持っている。そういうような人になつてほしいよね。マリヤでもマルタでも、その時の現象面はどっちでもいい。そういうった自在なる、本当の

「随所に主たる」

ということはそのういうことなんです。このキリストの話から、私たちはそこまで御霊の力で読み込んでこなくてはいかん。

## ● 万法帰一

禅宗の方にこういう言葉がある。

「二僧が趙州じょうしゅうに、『万法いっぽうに帰す、一何れの処ところにか帰す』と問うと、趙州は、『われ青州しやうしゅう（地名）に在つて、一領りやう（一着）の布衫ふさん（短い布）を作る、重きこと七斤しちじん』と答えた。」

「万法いっぽうに帰す。一何れの処ところにか帰す」

と。万法帰一。すべての法はある一つのところに帰するという。エペソ書に書いてある。

「信仰は一つ、バプテスマは一つ、希望は一つ、神は一つ、聖霊は一つ、キリストは一つ」

と。みんな一です。いつか私は「一なる宗教」という文章を書いた。今度は、

「一いづれのところにか帰す」

という。ここがさすがに大したものだ。「一いづれのところにか帰す」とは一体何を言おうとしているのか。そしたら、

「無に帰する」

と言いたくなる。「一いづれのところにか帰す」と聞いたら、

「われ青州に在つて、一領の反物を作っている。その重きは七斤だ」

と答えた。これはどういうことですか。万法帰一が観念になつてはダメだぞということですよ。たとえば、お菓子屋さんをやっている人なら、その答は、

「私は西洋菓子を作っている」

と、それでいい。即ち、

「自分の由り頼むのはただキリスト一つである」

ということ。これが

「一に帰する」



ということ、その「一に帰する」という「キリストと一つ」は、いずこに帰するかということ、「西洋菓子に帰する」というわけだ。ということは、

「キリストに在って自分は西洋菓子を作っている。キリストを信ずるということ、西洋菓子を作るということは一つだ」

ということ、いいですか。各人の実存に展開していく。

イエス・キリストはキリストとして天界にあつたが、ナザレのイエスという人物において、神はこのイエスという人物に焦点を結んだ。だから、キリストは、

「我を見し者は父を見しなり」

と言われた。それから今度は、あなた方一人ひとり、

「我を見し者はキリストを見しなり」

と言えなくてはいいかん。もちろん、現実の我は、「キリストを見しなり」なんていうことは、言えませんよ。しかし、

「わがうちなるキリストを見よ」

と言える。ペテロが

「我を見よ」

と言った時に、

「わがうちなるキリストを見よ」

ということ、**「我を見よ」**と言ったそのペテロがもの凄い奇蹟の業をした。跛者が立ってしまった。そしたら、民衆はペテロを神さまだと思つて、ペテロを拝もうしたら、

「なぜ、私を見るか」

と今度は逆に言つたでしょ。ペテロのあの言葉が素晴らしい。「我を見よ」と言つたペテロが、その次の言葉は、「なぜ、我を見るか」と言つた。分かるですか。その「我を見よ」は

「わがうちなるキリストを見よ」

ということ、人間ペテロを見たつて、ペテロの実存がどうだこうだと言つて見たつて、何になるかということ、

「あの牧師さんは素晴らしいな」

なんて、そんな牧師さんになつたらおしまいだよ。私は、人間小池はちつとも素晴らしいくない。あなた方よりかダメな野郎だ。けれども、このダメな破れ器にあるキリストを見よということ。このためには、私は世界のなに人にも絶対にはつきりと言えます。

「それでも、お前はこうじゃないか、ああじゃないか」

と。ああそうでしょう、そんなことはどうでもいい。だけれども、私の中に動いているこのキリストは本物です。キリストは破れ器、どろ器の中に入つてくださる。

「いずこにか帰する」

と言つたときに、その人において現象しているところの――私はどんな破れ器であつても、



そこを通して現象しているものがある。これは知らんです、何だか知らん。イエス・キリストということがもしお題目になったらダメです——キリストは千差万様の姿をもってあなたの方の中に帰するんだ。キリストは汝ら一人びとりに帰するという。驚くべきことです、これは。そういう真理を禅宗の方で語っているから、私は愉快でしょうがない。キリストの光で見ると、すぐ読めてしまう。

イエス・キリストが私たちの中に帰してください。では、一体、私たちの中に帰するとは何か。いかにして帰し得るか。それは言うまでもなく、御霊が入ってきて一如となっていく。

「一を求むる」

ということとは、具体的なものとしては聖霊です。しかし、「一を求むる」ということのもうひとつの内容は何かというと、その「一」という状況は何かというと、一如という状況です。いくら

「御霊、御霊」

なんて言ったって、一如というこの姿に、御霊と、一つにならなければ、御霊の一如の世界に入らなければ、御霊があるとは言えない。それは御霊が考えられてある。信仰の上で考えられたにすぎない。考えられた御霊なんか何にもならない。

「わがうちなるこの御霊を如何せん。これは何ものとも代えるわけにいかない。全世界とも代えるわけにはいきません」

と。これが言えなくていけない。

「人、全世界をもうくとも、己が生命を損せば、何の益かあらん、又その生命の代しろに何を与えんや」(マタイ16・26)

と。あの「生命」の内容は御霊です。御霊におけるところの生命です。

### ●無者

イエス・キリストは正に唯一者なんです。アウグストゥス・オクタビアヌスはローマ帝国の第一人者であった。その第一人者のいた時に、イエスというこの唯一者が現れた。

「我を見し者は父を見しなり」

と言える者は、イエスの他に東西古今一人もいない。そのイエス・キリストは自分を何者ともしなかったから、私はキリストのことを

「無者」、「無き者」

と言う。キリストは神の前に完全に破れ切っている。八方破れそのものです。そうしたらば、それが円現したわけです。このイエス・キリストという神の現象体——

「神の証者キリスト」

と題したのはそのことです——神の証者、現象体と、このイエス・キリストと御霊にあつ



て一如となる。キリスト者とはその他の何者でもない。

これが、マリヤが観音しているところの姿から、観音から今度はただ観ているばかりでなくて、全く即如の世界に、一如一体の世界に入っていくわけです。ヨハネ伝15章で、

「我に居れ。我に宿れ。我と一つになれ」

という。この頃の訳に

「私とつながっている」

なんて訳すけれども。切っても切れない関係にある。それが即ち、一如一体の関係です。

これは御霊が来なければ、一如一体にならない。申し上げているとおり、十字架です。十字架の関門を通過して、自分を投げ身していけば、聖霊は必ず来たりたもう。十字架なしに御霊と一つになろうとしたって、それは無理です。それは、いくらペテロがキリストの直弟子なんて言ったって、キリストは十字架を通過して天界に往くまでは、ペテロと一つになれないんです。はっきり分かってらっしゃる。

マリヤ線というものは、正に一如の世界に、一如一体の世界に入ると、今度はマルタ線は自在に出てくる。そこで、マリヤとマルタを、東洋と西洋を一つにしてしまおう。東洋と西洋をまだ分けているうちはダメですよ。そこはさすがに、ゲートルなんていうのは大きな人物だったから、

「東洋も西洋も神のものである。神の御手のものである」

というような言い方をしているが、あの通りです。

## ●東洋と西洋

内村鑑三先生が面白い文章を書いているから、ちょっと読んであげる。

「東洋と西洋」

という文章がある。内村先生が『聖書之研究』の巻頭に英文を掲げて、その意識みたいな和文を書いている。内村先生はアメリカに行つて、アマスト大学でシーリー教授を通して救に入つて、非常に恩はこうむっているのだけれども、アメリカのキリスト教は嫌で、散々アメリカの悪口を言っているんだけど、英語は達者だから英語でお書きなるわけです。

「人生は事業なりと西洋人は言つ。人生は安息なりと東洋人は言つ。人生は活動なりとは西洋において唱えられ、人生は実在なりと東洋において伝えらる。「速く。急げ。自己と世界とを幸福にせよ。それも一刻も早く」と西洋の代表者は言つ。「人はすでに幸福なるものなり、彼はただそのことを自覚すれば足る。ただ信ぜよ。さらば万事可なるべし」と東洋の代表者は言つ。西洋はマルタである。東洋はマリヤである。そうして主は、活動して休止するところ知らずして常に自己主張の宣伝に従事する西洋にむかいて言いたもう、なんじは多くの事により思い煩いて心づかいせり。されど無くてかのうまじきものは一つなり。マリヤ（東洋）はすでに良きかたを選びたり。こは彼女



より取るべからざるものなり」と(ルカ10・41～42)。エホバを待ち望め。雄々しかれ。なんじの心を堅つせよ。必ずやエホバを待ち望め(詩篇27・14)。エホバの救いを望みて、静かにこれを待つは善し(哀歌3・26)。(一九二二年七月『聖書の研究』)

これが内村先生の「東洋と西洋」ですが、この東洋と西洋をひっくりかえって一つにするものは、私がさっき言ったあの気合です。内村先生のこの本の中で私が一番好きなのはこの「クライスト・ウイズ・ミー」(わが衷なるキリスト)

という文章です。さすがに、内村先生だと思いました。これは1921年9月で、私の兄がちょうど死んだ月です。

「わが衷に宿り給うキリストとは聖霊御自身以外の者ではない。キリストは今天に在し、父の右に坐し給うと雖も、我をして地上に在りて孤児として存し給わず、彼は聖霊を以て我が衷に宿り給う。而して我を導き、我を教え、我を慰め給うこと彼が肉を受けて地上に在りて其弟子等と共に在し給いし時に異ならない。クリスチャンの強きは彼に無比の信仰有るからでない。詩人テニソンの謂ゆる「不朽の愛なる強き神の子」が彼の衷に宿り彼を通して働き給うからである。我は我を愛する者に由り勝ち得て余りあると云うのは我と偕に在し給う聖霊に由りて然かあるを得るのである。聖霊は現在の事実である。聖霊に由りて基督教は単に過去又は未来の事にあらずして、現在目下の事となるのである。「イエス答えて曰いは若し人我を愛せば我言を守らん。且我父は之を愛せん。我等(父と子)臨りて彼と偕に住むべし」とあるは此事である。(ヨハネ伝14章23節)。」

という文章ですが、非常に気持ちのいい文章ですね。

そういうことで、私たちは本当にこのイエス・キリストの霊が、御霊が我々のうちに内在し給うことによつて、一者と一如の世界に入る。これが求むるところの「一」です。一者をただ対象化してはダメ。唯一者を対象化しているうちはダメです。唯一者と一如の世界で、非常に極端な言葉を言うと

「我れキリストなるか、キリスト我れなるか」

というくらいにの境地に、私たちがとにかく瞬間でも何でも、いや実に本質的にはそこそこを私たちが受けとっている事態です。これはこの罪びとの中に宿り給うところのキリスト、病める者の中に来たり給うところのキリストなるがゆえに、キリストは私たちを救済せんとして常に進んで行く。全世界を、万人を救済せんとしてあるところのこのイエス・キリストです。

「我は進み行くなり」

とはそのような救済の事業を進めて行かれるわけです。そういう意味において、私たちは生涯をとおして、一つのことを追求して貫いていく。あのベートーヴェンの生涯をグリルパルツァーが言った言葉の一節に、



「ただ一つのことを追い求め、ただ一つのことを心に用い、ただ一つのことのために忍びながら、この男は全生涯を費やして行った。」

とある。ベートーヴェンは音楽という芸術に本当に生命賭けであったわけです。彼は一時、自殺もしようと思っただけです。

### ●『荒野に水は湧く』

どうですか、このあいだの

『荒野に水は湧く』（ぞうり履きの伝道者升崎外彦物語―田中芳三著、キリスト新聞社刊）

という本は。升崎という人のお母さんは死ぬ時に、この息子を坊さんにしてくれと言いつた。その夫は坊さんで、父はこの息子を坊主にしあげようと思っただころが、息子はどいうも仏教の世界はダメだと。そして、自殺をしようと思っただころが、電信柱にぶつかって火が出るようなことで、救世軍の声を聞いて――大嫌いなだけでも、仕方がないから溺れる者藁をもつかむ式に行ってみたところが――そこで救の糸口が開かれた。そして、もの凄いいキリスト追求をやったわけです。それで救われてしまった。患難を通して、生命賭けの求めでした。お父さんはこれに猛反対で、殺さんばかりの始末だった。それが、このお父さんをととうひっくり返してしまった。「カルバリ山を仰ぐ父」というところこう書いてある。

「父は書齋に引きこもり、聖書を手にとり、破邪顕正の意気込みで、この書物と取り組んだ。先ずマタイ伝一章から読み始めたが、さつぱり何のことか分からない。人に聞くのも業腹、読むでは考え、考えては読み、四章まで進むのに三年もかかった。こうして父はとうとう新旧六十六巻の聖書を何度も読み返し、わけても息子を拉し去った救世軍の山本軍平の名著平民の福音は、ボロボロになるまで読み、暗誦するほどになった。

父が驚き怪んだのはイエス・キリストの人格であった。人にして神、神にして人なるキリスト、我が日夜尊崇し奉る親鸞上人とは比較にならぬ、是は一介の僧侶、彼キリストは正に神の独り子と悟った。

「キリスト神ならば御姿を現わし給え」と父は三七廿一日の間、食を断ち、臥竜山鶯滝に水垢離の荒行を試みた。時は二月の半ば、父は六十五才であった。満願の二十一日目に、滝から上がって岩の上に坐し、掌を合わせて念じていると、白衣のキリストが彷彿として出現した。彼はその場に倒れた。云々」

それでもう、お前によって私は本当に救われたと言って、今度は息子を迎えて、土下座して謝り感謝したというようなことが書いてあった。この親子は凄いい。

とにかく、私たちはイエス・キリストの御霊が来て、それによって動けば、誰に何と言われようが、どんな患難を通そうが、必ず勝つ。その勝利は相手を救い上げる勝利です。



これを本当の担いと言います。どうぞ、皆さん、そういうことで、この「一」なる世界は、この一体一如の世界は何と素晴らしいか。これはイエス・キリストが現れたものであって、キリストの御名を讃えるより他の何ものでもない。ただ私たちはもう、平伏し平伏して行くだけの話です。そして、本当にこの福音なるかなと思うんです。

私なんかは生まれつき臆病者で弱虫でダメな野郎だよ。けれども、どうしてこうなったかと、昔の私を知っている人は正直驚くわけです。

皆さんは、あなた方は、本来の私よりも優れた人ばかりなんだ、ここに居る人は。それは絶対に私よりも凄くならざるを得ない。あと20、30年たったら、私は眩くてあなた方を見れなくなってしまう。どうぞ、そうなってください。

もう、あなた方は居ても立ってもいられないはずなんだ、この福音を受けとったら、観音してしまったならば。もうケチ臭い考えはよしてくださいよ。比較研究も何も要りはない。あなた方一人ひとり天下、一品に約束されているんだ。変な比較して、

「どうも、私はあれより不幸らしい」とか、

「少し才能が足りない」

とか、何を言うか。みんなそれぞれ大事なものをいただいている。それは人の目には見えないが、神さまは知っていていらつしやる。

「私はお前をそのように創ったんだ。それに磨きをかけるぞ」

と言われる。それが本当の献身です。何も難しくはない。キリストを本当に現すことが献身なんです。何も特別に教会の献身みたいなことをしなくたっていい。あるがままの姿で本当に打ち込んでいけば、それが神に献身している生涯となる。結婚しようがしまいが、どっちだって同じことだ。

そういうことで、相対的判断を絶対に乗り越えたところの次元です。いいですか。終わります。

